

2003年1月 講座

長山靖生

文筆家

井上章一「パンツが見える。」(朝日選書)

南條竹則「中華満喫」(新潮選書)

小熊英二「民主」と「愛国」(新曜社)

客観的で実証的でありながら、なおかつ著者の人柄がにじみ出ている研究がある。そうした著作は、扱っている題材の如何にかかわらず、人を惹きつける魅力がある。「パンツが見える。——羞恥心の現代史」は、まさにそんな一冊だった。いや、別にパンツに井上氏の人柄が出ているというわけではない。いかなる問題にも愚直なまでに冷静に迫ってゆく、その手法にこそ人柄がにじみ出ている。そしていつもながら、興奮させられる。

本書において、氏は「白木屋ズロース伝説」など、放置すればそのまま史実として定着していただであろう伝説を糺し、服飾史や文化史を超えて、近代日本の精神史にまで達する。その手腕に、揺さぶられた。こういう話題を探求しながら、その姿勢があくまで厳格かつ品位あるというのは、まことに御見事というほかはない。

南條竹則氏といえば、知るひとぞ知る英文学者にして幻想小説家とは世を忍ぶ飯の姿。実は、温泉通にして、中華を喰わせた日本一の男である。そんな氏の「中華満喫」は、単なる蕪蓄うんちくグルメ本ではない。喰

わずにはいられない人間の虚しさとは儂はかなさへの諦念が、まことに味わい深い一冊。
『単一民族神話の起源』(「日本人」の境界で、「日本」という物語の深層を掘り起こしてきた小熊英二氏は、「民主」と「愛国」——戦後日本のナショナリズムと公共性)において、自らの立っているまさに足下の地面を掘り返してみせた。